

生み育てる人の心と体に寄り添うための 子育て支援者「15のまなび」

15のまなび 第14・15回「子育ての文化を歴史的に探る」

講師：朱 まりこ（子育ての文化研究所 代表）

12月1日（土）舞鶴会場 12月2日（日）宇治会場 13：30～16：30

今年度最後の15のまなびは、子育ての文化研究所代表の朱まりこさんです。昨年度に引き続き「子育ての文化を歴史的に探る」と題してご講演していただきました。

今回の講座の前半では、昨年度、子育ての文化研究所が発刊し好評をいただいている「AKAGO」①②に引き続き、現在編集中の「AKAGO」③について制作の思い、何を今伝えていきたいのかについてお話いただきました。

後半では、今の子育てについて考えるには、脈々と受け継がれてきた子育ての文化についてそのありようを振り返ることが手掛かりになるのではないかとのお考えから貴重な資料を見せていただきながらのお話でした。

以下、講演内容をご紹介します。

AKAGO 冊子①②を経て、AKAGO③に今取りかかっています。

AKAGO①では、赤ちゃんを育てるとはどういうことなのかをテーマに、スタートブックという形でざっと赤ちゃんのことを分かってもらえるよう作りしました。そして、もう少し赤ちゃんのことが分かるようにと AKAGO②を作りしました。AKAGO②では、特に「妊娠」について書きました。妊娠は大事な時期であることを知ってほしいと丁寧に伝えました。今は、妊娠すれば産まれるということがイコールで結ばれています。でもそうではない、実はとても大事なことだと載せています。

AKAGO①②は、赤ちゃんについて、生まれてから首が据わるまでを考えて載せたので、AKAGO③は首が据わってから立ち上がるくらいまでを考えて出来あがる予定でした。ところが、世の中にはいろんな育児書があり、そこに書いてあることをわざわざ書かなくても、AKAGOは書いていないことを伝えるべきではないかと思い立ちました。では、それは何なのか。

発達面では先月、迫さんが、今までと違った視点で発達には順序があり、寝返り一つでも、できない子はある時突然できるのではなく、少しずつ体の動かし方が分かるようになり寝返りができるようになる、それができるまで待つという視点をお母さんにきちんと持ってもらうことなどを話してくれました。

それから、子どもが持つ色々な能力については、持った力は発揮してもらいたい、せっかく歩くようになったにも関わらず、いつまでも抱っこ紐に入れてお母さんが連れ歩くようなことが最近、起こっています。そうではなく、その子が獲得し

た能力はきちんと発揮できる環境を整えていってあげることが大事だという講座をしてもらいました。

このようなことから、親がさせたいと思うことが今の世の中まかり通っている、それで良いのか？という視点を持つこと。親がさせたいことではなく子どもがしたいという部分を尊重していけるような視点で物事を見ていく。そのような視点からAKAGO③を読んで貰って赤ちゃんも一人の人間として人権があり、人としてちゃんと生きているということ、母と父の従属物では無いということ。もっと簡単に言えば、叱ったりするより受け止めましょう。子どもが大きくなり指図をするより一緒にやってみたり、一緒にやることに関しても、ついつい親がやってしまいがちで、そうではなく見守ってあげるなど、視点を変換できるようなニュアンスを持ったテキスト版③にしたいという思いになり、作り直しています。おっぱいを吸うにはどのような意味があり、そこから何が獲得できるのかなど、今までの本に書いていないような内容にしようと、そして改めて感じてもらう内容にしたいと考えました。今日は皆さんに、原稿の原案の部分をお渡ししています。その中から話しを進めていきたいと思っております。

赤ちゃんは生まれた時から意志を持った一人の人間です。

この一行がとても伝えたいことです。

すごく当たり前のことですが、今のお父さん、お母さんは本当にそう思っているのかを感じていて、キツイ言葉のようですが、編集スタッフの中には人権という言葉がこの中で使うのはどうなのかという意見もあり、もう少し検討中です。当然のことながら赤ちゃんにも人権があります。赤ちゃんの人権を尊重していく事はとても大切な事です。

虐待が取り沙汰されていますが、赤ちゃんに人権があるという意識がまずあれば、大人が子どもに対し、しつけだと思ってさせていた色々な事件も防げると思っています。その為には2歳や5歳になって子どもには人権があると言うのではなく、生まれて初めて抱いた時、この赤ちゃんにも人権があるということをまず知ってもらうことがとても重要だと思っています。

AKAGOは①②③は、できればお腹の中にいる時点で、これからお父さん、お母さんになる人に読んでもらいたいと思っています。ですから、まだ赤ちゃんを抱いていない人にも分かる形で説明を書いています。

AKAGO③テキストの文章から

●赤ちゃんは生まれた日から自分の力を発揮して生きています。

もちろん、赤ちゃんはおっぱいを飲む、衣服を着る、眠ることさえ大人の援助なしにはできません。当然、命を維持することは、大人の援助があつてこそと言え

るでしょう。けれど、赤ちゃんは自分の意志を超え眼差し、表情など体全体を使って表現しています。赤ちゃんの行動を丁寧に見ると、生まれたその日から意志を持った一人の人間であると気付くことができるでしょう。

こんな小さな頃から意思を尊重すべきだなんてと思われるかもしれませんが、赤ちゃんの頃から人権意識を持って赤ちゃんを育てると、赤ちゃんの気持ちが分かるようになってきます。

●お母さんの顔と赤ちゃんの顔が向き合っている、そして目から目に…。

生まれた日から赤ちゃんとの視線を合わせ、お話しをしてみましょう。(20cm位の距離で見つめるようにします)すると、お腹の中にいた頃聞いていた声が、自分に向けて話し掛けている声に赤ちゃんは気付くはずですが。このとき、生まれてすぐの赤ちゃんは快を感じています。赤ちゃんは感情がないように思っている人もいますが、生まれた時から快か不快かの感情は持っています。

●授乳という言葉の持つ意味から

おっぱいを飲む行為は母から子へ一方通行のように捉えてしまいがちですがそうではありません。お母さんの顔を見て美味しいよとおっぱいをしっかり飲んでるのは、意志を持って飲もうという気持ちのある赤ちゃんです。

お母さんがイライラしていたり、他の用事をしながら授乳したりすると、赤ちゃんは乳首を噛んだり、離したりします。あれは「ちゃんと見ていてね」という気持ちの表れかもしれません。

●離乳食を泣いて嫌がる時、吐き出す時、赤ちゃんは自分のできる方法で嫌だという気持ちを伝えているのです。そこでお母さんがその理由を推測してみると、嫌がっていることへの解決の糸口が見えてくるはずです。

●抱き方を変えたら赤ちゃんが泣き止んだという経験を持つお母さんは多いはずですが。抱いている大人には分かりませんが、赤ちゃんは伝えたいことがあって泣いていたのかもしれません。居心地が悪い、ずり落ちそうで気持ちが悪い、もしかすると今は抱っこ気分ではないなど…。赤ちゃんは一日中、やみくもに泣いているわけではありません。自分にとって不都合な場面にだけ泣くという手段を使って伝えています。なぜ泣くのか、赤ちゃんの立場になって考えるとその理由が見えてくるかもしれません。

●赤ちゃんは自分の力を発揮して色んな動きを獲得します。

一つ一つの動きを丁寧に積み重ねて次の動きを獲得しているのです。

赤ちゃんは自分の手を見つめたり、自分の手を口の中に全部入れたり、色んなことをしながら、一つ一つの体の部位を発見したり確認したり、日々新たなことに挑戦していきます。赤ちゃんは何もできないのではなく、一生懸命頑張っています。そんな赤ちゃんに向かって話かけ、みんなで赤ちゃんの育ちを応援していきましょう。

このような6つの話を入れながら、赤ちゃんにも一人ひとり気持ちを持って、自分の意志を持って生きているということ、まずAKAGOの最初に知ってもらいたいと考えました。このようなことを書いてある本を探しても育児書にはありません。実際、体のことや、口はどのような役割をするのか、ミルクと母乳の話や、どのような食べ物を食べるのかなど……。それから言葉のこと(わらべうたなど)、おもちゃの使い方、あとはお母さんの時間の使い方はどうなのか、人に頼ることをもっとしても良いのではないかという提案など。そして最後はスマホの使い方についてなどを、しっかり伝えたいと思っています。AKAGO③では、未然に防げることを知っていれば、ずいぶん変わらと思うので、このような構成に変えることにしました。

赤ちゃんに喋りかけることの大切さ

遠野のわらべうたでは0歳から1歳くらいまでに、8つくらいのことを覚えると、イエス、ノー、恥ずかしい気持ち、嬉しい気持ち、上手にできた、人を褒めたりすることができるようになりますと言います。そのようなことを丁寧にAKAGO③では伝えています。それから、お母さんの声について、喋るとはどういう意味があるのか。

AKAGO①には、いっぱいお喋りをしましょうというページがあります。

言語獲得のところで一緒に同じものを見るなどと丁寧に書いてあり、①でこのことは分かってもらったと思うので、③では喋りかけよう、たったこれだけのことを伝えるページにしています。というのも、喋りかけないお母さんがいるからです。赤ちゃんが返事をしない、自分から言葉を喋らないので喋りかける必要がないと思っている人が増えてきています。

核家族になる前、大家族で暮らしていたときは誰かが常に喋ってくれていて、それに赤ちゃんが笑ったりするのを見て、喋ることは意味がある、赤ちゃんにみんなが喋りかけてくれていることがお母さんに伝わっていました。でも、今は赤ちゃんと一対一での生活が主で、喋らない赤ちゃんに喋りかけると恥ずかしいと思っていたり、赤ちゃんがどうして欲しいのかは顔を見れば分かるので、声に出して言う必要を感じないし一人芝居のようで格好悪いと言う声も聞きます。

以前も、抱っこ講座に来られた2~5か月くらいの赤ちゃんを持つお母さんたち

に、抱っこして下さいと言うと無言のまま抱き上げるお母さんが結構いました。そこで、赤ちゃんに喋りかけるよう丁寧に伝えました。すると、その中で一人、「犬を飼っていて犬には朝からいっぱい喋ってきました。犬はしっぽを降ってくれるし、犬とは心が通じていると思っているので、でも赤ちゃんは返事をしてくれないのでその気持ちが全くなかった」と反省されたお母さんがいました。赤ちゃんのことはとても可愛がっているのに、語りかける必要があるとは感じなかったと自ら反省されていましたが、その犬の話から他のお母さんたちも雰囲気ガラッと変わり、その後からは皆さん、赤ちゃんに声をかけて喋りかけるようになりました。やはり、そういうことを思ったときは伝えなければいけないと思いページに載せています。

赤ちゃんはお母さんの声が大好きです

赤ちゃんはお腹の中でだいたい 20 週くらいから耳が聞こえるそうです。

お腹の中でずっと聞いていたお母さんの声が、生まれてからも大事な安心の基地、生まれた赤ちゃんにはお母さんの声は胎内時よりも少し高めに聞こえます。(お腹の中なので骨を伝わってくすんだ、低い声になると言われています。)

出産後、赤ちゃんはたとえママと同室であっても、ママの声を聞くことが少なくなるでしょう。そう考えると赤ちゃんが不安になるのも無理はありません。生まれた日から赤ちゃんの目を見て語りかけ、ママの声をたくさん聞かせてあげましょう。

赤ちゃんの泣き声は言葉よりも万能

人間が物事を相手に伝達する際、コミュニケーションの手段として言葉が使われるのは全体のわずか 10%に過ぎないと言われています。

つまり言葉を流暢に操れる大人になっても 90%は表情や声のトーン、身振り、目の動きなどで伝えています。ということは、言葉を操れない赤ちゃんとのコミュニケーションもだいたい 50%は取れることができるという風に考えてもらえたらと思います。赤ちゃんはお腹が空いた、おむつが汚れた、眠い、うまく眠れない、痒い、気持ちが悪いなど、色んなことを泣き声や全身で伝えています。

分かるうとすれば分かることが言葉でなくてもあるのではないかと思います。

そんな赤ちゃんとお喋りをしましょう

赤ちゃんは声だけでなく、目、表情や体まで使って自分の意志を伝えています。

ママからも言葉やジェスチャーで働きかけてみましょう。

中には話し掛けられないお母さんもいます、なぜ話し掛けられないの？と尋ねると、様子を見れば分かる、話し掛けても返事をしないから、とのこと。しかし言葉の獲得は自分に向けて発信された言葉の積み重ねです。

最初は、もしかすると一人芝居のように感じるかもしれませんが。でも赤ちゃんの顔や様子を見ていると声以外の返事に気付くようになります。

お子さんと言葉のキャッチボールできる日を夢見て毎日お喋りを続けて下さい。

相手を分かろうとすることと、反対に相手が考え、自分で行動を起こすべき時に先取りするのは違います。赤ちゃんが自分の意志を伝えようとする前に、「そろそろお腹が空くね、今日はこのおもちゃで遊びましょう」とママが先回りし過ぎると、赤ちゃんは主張する必要がなくなり発信しないようになっていきます。

赤ちゃんのコミュニケーション能力を高める為にも、あなたはどうしたいのか？赤ちゃんの様子を見ながら語りかけてあげるようにしましょう。

赤ちゃん絵本の楽しみ方

毎日忙しい赤ちゃんとの生活、家事や仕事、スマホの手を少し止めて、赤ちゃんと一緒に絵本を楽しむひとときを過ごしてみませんか？

そうは思っても、赤ちゃんは絵本を読めるの？どんな風に読めば良い？どんな絵本を選べば良いの？など悩みます。赤ちゃんと一緒に寝転がりながら絵本を見たり、膝に丸く抱っこしたり、気軽に楽しんでみませんか？身近な大人の声を聞きながら一緒に絵本を楽しむことは赤ちゃんにとって心地良いひとときです。上手に読まなければと思わず、話しをするつもりで語りかけてみて下さい。

赤ちゃんは自分で絵本を楽しんでいます。赤ちゃんは見るもの、触るもの、全てに興味、関心、好奇心がいっぱいです。噛んだり舐めたりすることがものへの好奇心、絵本の世界への入り口です。

読みたいように、見たいように、好きなように見守ってね。

赤ちゃんに絵本を読もうとすると、赤ちゃんはページをどんどんめくったり、最初に戻ったり、なかなかページ通り読ませてくれません。ページをめくるのが楽しい時期でもあります、大人がするように自分でもしてみたい、読んでみたいと思っているのかもしれませんが。

この頃の絵本はおもちゃの一部です。おもちゃの中に絵本があると思ってもらって噛んだり、触ったり、舐めたりするものだと思ってもらおうと良いです。

お母さんたちは絵本にはちゃんと字が書いてある、お母さんが読もうとすると赤ちゃんは本を閉じたりする、それはそれで大丈夫です。この年齢は、絵本の通り字を読まなくても、お母さんが思ったとおりに見て、読めば大丈夫。

ただ、一番の目的は絵本を好きになってもらうこと、絵本は母と子、父と子、お婆ちゃんと子などコミュニケーションをする為の一つのツールであるということ。始めは赤ちゃんの身近な食べ物や動物などの、ものの絵本や「いないいないばあ」など遊びの入った絵本で、耳に心地良い、リズムのある言葉が含まれる絵本が良

と思います。たくさん読まなくても、無理矢理読ませようとしなくても良いです。何か一冊でもお気に入りの本に出会えるときっと楽しくなります。

子どもの行動の意味を示す安心感の輪

お母さんに少し、子どもの行動はこういう意味合いを持って動いていると知ってもらおうと子育てがし易いと思います。AKAGO③に安心感の輪を、上の輪のことを出掛ける輪、下の輪を帰る輪という言い方をして、お母さんたちにも分かりやすいように載せています。

一番赤ちゃんにとって大切な人、身近な人ということでお母さんと表記しています。お母さんの膝にずっといた子どもが、何かの拍子に目を天井に向け始める、そしてまた戻ってきてお母さんと目を合わせるようになる、これも安心感の一つの輪だと思っています。「いつもお母さんの側で遊んでいる、少し先におもちゃがあるので、赤ちゃんははいはいして取りに行く、そしてまたお母さんの元に戻ってくる、これが安心感の輪です」とお母さんに話しながら伝えると分かってもらい易かったので、この輪が一つのヒントだと思いました。

怖いときや悲しいとき、困ったときだけではなく、楽しいとき、嬉しいときでも戻ってきます。なぜ戻ってくるのかというとそれは大事な人だからと、きちんと伝えるようにしています。

次のAKAGO③の概要はこのような感じで作っています。

意識的に伝えていく子育ての文化

赤ちゃんがお腹に入ると母性が芽生え、女性は母になると言われてきました。そうではなく、子育てをしているからこそお母さんとしての気持ちが生まれてくるし、子育ては誰もがができるものではなく、やはり伝えられてきた一定の行動様式や生活様式なので、行為が続いてきたことによる成果が子育ての文化だと思います。おじいちゃん、おばあちゃんの経験がお母さんに伝わり、お母さんは自分の娘やお嫁さんに伝えていく中で、自分の子ども時代から赤ちゃんにどのように接していくのかを知ってきました。その繋がり、連鎖で子育てというものは、どうしていくものかということが伝えられてきたはずでした。

それが今はその「はず」が実際には伝えられていないということが色んなところで見えてきています。それは、おんぶの仕方を知らないだけでなく、ごく普通に抱っこをしてよしよしと撫でるスピードだったり、歌を歌いながら抱っこをして揺らせてあげる、その揺らし方を知らなかったり……。こんなことを実際知らないお母さんたちがいます。子育ての文化がどんどん消滅していつている、母から娘だけの継承では無理になってきている現実があります。子育てをめぐる変化や女性の体の変化、社会の変化、妊娠出産の生活の変化や実際生きている社会との

結びつきの希薄化があり、子育てがうまくいかないこともある。そして日本の子育て感の変化による母親の思い込みもあります。子育ては母親である私がきちんとしなければいけない、人に頼ってはいけないなど様々あります。

明治の初めの子育ては、父と母が一緒にするものだというのが普通でした。それが大正以降、ずっと良妻賢母という言葉が出てきて違うようになるのですが、戦後にまともになりかける時期もあったことは書物などを読むと感じられます。今、現代のお母さんは大正時代よりもさらに強く、子育ては母親である私がきちんとしなければいけないという思いに駆られているのではないかと思う事があります。受け継がれてきた子育てという文化をもっと意識的に意図をもってきちんと伝えていかなければいけないし、そのことが虐待の未然防止にもなっていくだろうし、子育てが楽しくなるためにも必要だと思います。

まず子育ての知識や方法を知っていくときに、先ほど伝えた安心感の輪というのは、今までとは違う新しい視点だと思います。そういうものもあれば、昔から受け継がれてきた良いものを使うのも必要だと思います。

AKAGO ではそのあたりを兼ね備えたものを作っていきたいと思っています。

子育て中の親子に AKAGO が必要な理由

①母子が孤立する傾向が高いので、社会や、地域に開かれた窓としての冊子として役立てて欲しい

②今までは必要でなかったので知らなかった知識や技術がたくさんあり、それを修得してもらえる場にしたい

③経験がないこと、子育てを一度でもしたことがある人が側にいれば、自分がお母さんになった時、心得のようなものや知っていることがあると思うが、それもない、経験なし、知識なし、子育て文化の引き継ぎができていないのだとしたら、引き継ぎの場として AKAGO を活用して欲しい

④父親が忙しいということ

江戸時代のように父親の仕事場が家から近い、もしくは同じだった時代は、子育てにかなりの役割を果たしていた、それが今は母親が全て一人で背負うようになってきた中で、母親の子育ての手助けとして情報を伝えていかなければいけない

⑤共働き家庭の増加

父親だけの給料だけでは生活の見通しがたたない家庭が圧倒的に増えているということ。子どもが大きくなるにつれ、学費や自分達の老後などのためお金を貯めなければいけない。そうなる子育ての専業期間を短縮して早めに所得を得るために仕事に復帰する人が増えている。そこで私たちができることは、お金を無駄に使わない子育てができないかと提案していきたい

このように知識がない、適切に関わってもらえないという中で育った乳幼児を一人でも減らしていきたいという願いを持って AKAGO を作っています。

AKAGO で果たせることがあるとするなら・・・

- ・親が 子育ての基本となる知識・知恵を得る
- ・親が 自分の不安の解決を図るきっかけを作る
- ・親が 「しんどいのは自分だけではない」 ことに気付く
- ・親が 子育てを前向きに捉える力を育む
- ・親が 子育ての楽しさを実感する
- ・親が 子どもの欲求に読み取る力をつける
- ・親が 子どもに寄り添う力を高める
- ・親が 人に助けってもらうことの意味を知る
- ・子どもの健全なアタッチメントを育む
- ・子育ては、親だけではなく、みんなで支え合うものだと知る。

写真や絵画の歴史から見る授乳意識の変化

国宝の土偶で、縄文のビーナスと呼ばれているものがあります。

妊娠した女性を象ったもので、4000年から5000年前の縄文中期のものだと言われています。次は約7cmの小さな土偶で、お母さんが子どもにおっぱいを飲ませている姿をしています。こちらも4500年前くらいの縄文中期の土偶です。

おんぶの土偶や、教科書にも載っていた縄文時代晩期の女性の姿の土偶があり、女性がどれだけ大事だったのかが、これらの土偶から分かるような気がします。古墳時代にも「乳飲み児を抱く埴輪」が出土しています。このように見ていくと、やはりおっぱいというのはとても大事なもので、それがなければ赤ちゃんは生きていけないので、とても大切なものだと思われていたと分かります。

それから時代は飛びますが、鎌倉末期 長谷雄草紙から、魚を買っている赤ちゃんをおんぶしたお母さんの絵があります。これから分かるのは、お母さんの着物の中に赤ちゃんを入れておんぶしているということ。このスタイルは江戸時代にもよく登場します。他にも、ふくよかなお母さんが赤ちゃんにおっぱいを飲ませている絵や、13世紀の西行物語絵巻に出てくる、足で踏んで洗濯をしているお母さんの絵があり、これもお母さんの着物の中に赤ちゃんを入れておんぶしています。

浮世絵でも赤ちゃんを抱いた女性の絵はたくさんあります。中でも、有名な喜多川月麿、喜多川歌麿の絵で、おっぱいを吸っている赤ちゃんの姿があり、赤ちゃんがお母さんのおっぱいを飲んで幸せそうに描かれた絵で、好まれているのが分かります。他にも山姥と金太郎という、やはりおっぱいを与えている絵があり、

この絵は色んなシーンで用いられたようです。

続いて、山形の鶴岡土人形の写真から、江戸時代の終わりから明治の初めにかけての人形で、穏やかな顔をした姥が赤ちゃんにおっぱいを与えています。

現代でも、滋賀の「小幡人形」と東京の「今戸人形」があり、これらもおっぱいを出して赤ちゃんに飲ませている姿の人形があります。

ですが、現代の人形はおっぱいを昔ほど露わにしていない、現代と昔でおっぱいを見せる感覚の差を感じます。

いつ頃からどう変わっていったのか、写真で振り返ると、運動会のお昼休みなのか、大勢の人たちがお昼を食べて集まった中、お母さんがおっぱいを出して、これも赤ちゃんではない、結構大きな子どもに飲ませている写真があります。

他にも若いお母さんが、赤ちゃんにおっぱいを与えているのに平気で写真を取られているのがあったり、下の子どもにおっぱいを与えながら、上の子どもが膝に乗っているお母さんの写真や、お母さんが赤ちゃんにおっぱいを与えているのをおじいちゃんやお婆ちゃんが見守っている写真もあります。それでもお母さんは赤ちゃんが飲んでくれているのを嬉しそうに見ています。これは昭和 30 年代の写真ですが、このような情景、今では考えられないと思います。やはりこのような違いは、とても問題があると思うのです。おっぱいを飲むのを隠すようになり、これから先どうなっていくのか心配します。

おんぶの意味とさまざまなおんぶのしかた

ウィキペディアで調べると、次のように載っています。「通常は背負う側が両手を後ろに回し、背負われる側が腰のやや前方を両手で持って体重を支えるが、おんぶしながら両手を自由にするために「おぶい紐」などの補助具を用いる場合もある。」「子どもを背負うおんぶ」については、「おんぶは赤ちゃんをあやすなどのスキンシップとして行われる他に、保育をしながら買い物や家事といった他の作業をしたいときに、目を離さず作業する場面に用いられる。」

このように、おんぶについて分かったような気になっていましたが、このウィキペディアを見てびっくりしました。

おんぶは基本素手でこのようにするものだという風にかかれていること、そして中程に「子どもを背負うおんぶ」について書かれているということは、前半で言っていることは大人が大人にするおんぶについてなのか。あとは、赤ちゃんをあやすためのスキンシップとも書かれていますが、私たちは「買い物や家事など他の作業をしたいときに目を離さず作業する場面に用いられる」ということを真っ先に書くものだと思っていましたが、そうではないことにビックリします。

製品として縫われた「愛育こどもバンド」と呼ばれる抱っこ紐があり、大正期に箱に入って売られたもので上流家庭ではこのようなものが使われていました。

昭和になり、農村でもおんぶ紐が使われていた写真が残っています。おじいちゃんが孫をおんぶしている写真があり、父親、母親は大きな労働力なので、おじいちゃん、お婆ちゃんが子守などの役割をしていたと分かります。昔からの絵にある、おんぶをしている子どもの位置と、昭和の写真から見るおんぶをしている子どもの位置は、親の肩に子どもの顔が出ている、高い位置です。そうすることで、子どもは外の景色をお母さんの肩越しから見ることができました。おんぶの基本の位置です。

それから、着物の中に赤ちゃんを入れておんぶをするというの鎌倉時代から昭和初めまで同じスタイルです。日本では肌に直接、赤ちゃんを背負って上から着物を着るとというのが基本スタイルだったのではないかと思います。

昭和30年代くらいになると様々で、ねんねこを着て赤ちゃんをおんぶしていたり、おんぶ紐だけで背負っている子どもの写真もあります。共通しているのは、どの子どももおんぶをして子守しています。『昔の暮らしと子どもたち』という本があり、ものの名前や説明が写真と共に載っています。おんぶ紐と綿入れを説明する写真などが載っていて、解説には「前抱きは他人が子どもに声を掛けたり襟巻きを掛け直してやったりすることができない」とあり、おんぶだからこそそれができたとあります。それから、1957年代、子どもは仕事として子守をしている様子など載っています。

最近、宮古島におんぶの仕方をお婆ちゃんたちに教わりに行きました。

抱っこ紐を使って前抱きするそうで、このとき使っている紐はエイサーのとき頭に巻く紐だそうです。なので、長さが限られているので、おんぶにせよ抱っこにせよ、シンプルに巻いて使っていると言っていました。

新潟で同じように、おんぶがどのようにされているのか調べに行ったときは、使っている紐の幅が92cmくらいで、ウールのメリンスという生地でした。

おんぶの仕方としては沖縄と同じでした。沖縄では30cm幅の短い布、新潟では92cmの長い布、これは暑い地域と豪雪地帯とで、おんぶ紐一つとっても、その地域の気候風土に合わせて変わっていくということが分かりました。

では、アイヌ民族ではどうだったのか。絵はがきになっている写真があります。見ると、親の肩より、まだ上の位置で結構大きな子どもをおんぶして映っています。小さい赤ちゃんは袋の中に入って、親の肩より下の位置でおんぶされています。小さい子どもはみんな袋に入っていて、木が一本あり吊ってあります。

「子どもは着物の内側に入れて背負い、タリペを額にあて着物の外側から背中にイエオマブをぶら下げて、子どもを横棒に座らせるようにします。子どもはちょうどブランコに乗ったような格好でおんぶされる」とあります。これは小さい子

ども用で、大きな子どもは服の外に木の棒に座るようになるそうで、親の肩より上の位置におぶわれる形になります。

もっと古くはどうか調べると、1942年にアイヌ婦人子守の図というのがありました。「幼児を大人の衣服に包み、裾を端折って緩く紐をもって縛り、その袖を絞った部分を子守の額にかけ、子どもを子守の頭に吊した形として、両手を後ろに回して手で支えた」とあります。このように一つの民族のおんぶも形が変わっていったのが分かります。

朝鮮のおんぶの写真もあります。腹帯のように帯でグルグル巻いて、お姉ちゃんが赤ちゃんをおんぶしています。巻き方としては、赤ちゃんが反るとひっくり返るような感じの開いた巻き方をしていますが、体幹がしっかりした子どもをおんぶしているので大丈夫だと思われます。素手でおんぶしている写真もあり、日本と似ていると感じます。

最近では、2018年5月のクーヨンの表紙があります。これはおんぶの位置がかなり低いです。既製のおんぶ紐を使っているらしいですが、これでは赤ちゃんが可哀想だと思ったのですが、朝鮮のおんぶと非常に良く似た位置でおんぶされていると分かります。これはこのような育ちをされて、同じ民族なので、何も思わずこのような抱き方をしたのかなと思ったりしました。

アイヌも年齢で変わっていますし、民族が変われば括る位置も変わる、〇〇でなければダメだという伝統などは、どのあたりまでどう考えるのか、たかが、おんぶですがされどおんぶだどつくづく感じました。

世界各地で見るぐるぐる巻き

樺太でグルグル巻きにされている赤ちゃんの絵はがきに出会いました。子どもを籠に入れてしっかり寒さ除けのため、布をグルグル巻きにしています。おっぱいを飲ませるときも籠に入ったまま飲ませています。

こんな風にして赤ちゃんが育つのかとある意味ビックリしました。ですがこの地域の赤ちゃんは、それでも元気に育っているので、もう少し詳しく知りたいと思うようになりました。他にも樺太中部以北及び対岸のアムール川下流域に住むモンゴロイドの少数民族は、木の板に袋を付けてその中に赤ちゃんを入れて抱っこしている絵があります。

それから、ネイティブアメリカンのスワドリングも、先の樺太のグルグル巻きと似ていて、籠に入ったグルグル巻きにされた赤ちゃんを木の枝に吊したりしたそうです。地面は色んな動物が行き交いするので危険、でも木に吊しておけば見えるし安全だということです。落ちないようにグルグル巻きにして固定していたそうです。アフリカにもスワドリングがあり、聖母子像にもそのようなグルグル巻

きの絵があり、当時流行っていたのでキリストもきっとそうだろうと頭で考えたスタイルだろうと思われます。

その頃、フランスのルイ 14 世が赤ちゃんだった頃、足をグルグル巻きにされている絵が残っています。こうすることで足の真っ直ぐな子どもに育つと考えられていたそうです。

モンゴルの赤ちゃんの写真も体をグルグル巻きにされています。モンゴルは 1 年の内、8 か月間氷点下となり、寒冷地帯のモンゴルならではの子育てのスタイルです。窮屈にはならないよう 2 箇所、腕と足の部分で括っており、最小限だと感じられます。これが今のモンゴルの赤ちゃんの普通の育ち方です。

日本各地のつぶら、えじこなど

さて、日本ではどうだったのか見ると、明治の絵はがきがあります。

おくるみでしっかり、手も足も出ないように巻かれています。

昭和 29 年岩手県での写真では、雪の中でおじいちゃんに抱っこされた写真がありますが、赤ちゃんの顔以外、ねんねこなのか、半纏なのか、体は包まれています。

遠野で撮影された写真があります。ワラでできた赤ちゃんが動かないように入れておく入れ物があり、寒さよけでもあります。木の桶に入っている写真もあり、赤ちゃんが動かないよう紐できっちり固定されています。

白川郷でも同じような育て方で、白川郷は合掌造りで有名ですが、そこに 2、30 人が一家族として住んでいます。女系家族で女の人ばかりが残っていくので、畑仕事に行くと、同じ歳の赤ちゃんがいて赤ちゃんを入れるつぶらが 6、7 個が縁側に並びます。中にはつぶらから出た手をネズミにかじられたと言う話も聞きましたが、当時は非常に貧しかった中での、共同体の生活でした。縁側につぶらに入った赤ちゃんが並び、おっばいが出る女性が帰ってくると、我が子に先に行くのではなく、一番泣いている赤ちゃんのところへ行きおっばいを飲ませる、そして順番にあげてからまた畑仕事に戻っていくという生活でした。

次にメリンスのおんぶ紐の説明をした新潟にも、つぐらと言う赤ちゃんを入れる籠があります。博物館で展示もされていて、おむつを干す籠もありました。

中に七輪や練炭を入れて周りに干したおむつを乾かしていたそうです。

滋賀県高島市にもえじこがあります、実物は本当に大きいです。こちらのえじこの下部分は木でできていて船底型になっています。少し押すとゆらゆら揺れます。えじこの中は下に灰を入れ、その上にボロ布を敷き、赤ちゃんを入れていました。そして赤ちゃんが動かないよう詰め物をします。その中で赤ちゃんはおしっこやうんちをしても灰が吸収し、その灰を取り替えることで汚れを取り除いたそうで

す。

これらを踏まえて、自分達の知っていることというのは結構限られていて、昭和30年のことも知らなくなってきました。どんどん変わってきていて、それが勿体ないという想いもあれば、必要がなくなったので消えていったものもあると思います。それでも、少し私たちは何が消えて、何が残ったのか、それにはどのような意味があるのかということ、子育て文化研究所という名前を付けて活動している以上、もう少し知っていかなければいけないと思いました。

おくるみについても、生まれてすぐの赤ちゃんは寝ている時、手をひくひく動かしたりすることがあり、それだけで赤ちゃんは起きてしまいます。そんな時おくるみで包んであげれば落ち着くかもしれませんが、今はおくるみが少なくなっていて、あってもガーゼのように薄い生地になっているので、赤ちゃんの手が動く妨げにならないのもどうなのかと、もう少し考える必要があるだろうと思ったりします。

最後に見てもらうのは私立郡山子守学校の集合写真から。

色々なところでおんぶを否定的に言われることがあります。「昔おんぶをしましたか？」と聞くと「おんぶなどしていない、うちには人手があったから」と言われることがあります。それはなぜかと言うとキーワードは子守だと思いました。

郡山に子守学校があり、だいたい130人くらいの子どもが通っていました。

自分の兄弟を毎日おんぶして通わなければいけない子もいれば、奉公先に働きに出て、奉公先の赤ちゃんを毎日おんぶして通って来る子どももいました。

他にも当時、子守学校は300くらいありました。子どもたちはノートや鉛筆を買えない状況でも、周りの人たちが調達してくれたりしたそうです。

この子守学校の写真を見てビックリしたのは、よく見ると結構大きな子どももいることです。普通の学校に通えない、でもこの学校なら通うことができたかららしいですが、大きな子どもから小さな子どもまで一緒に教室で勉強していました。よく子守唄にある、悲しい言葉がおんぶとイコールになっていて先の話のように「おんぶなんてしなかった」と言う人に繋がるのだと思うのです。それでも学校から帰ると兄弟たちをおんぶして遊びに行ったり、中には一人っ子でおんぶする相手がおらず、先生の子どもをおんぶして、みんなと一緒に遊んでいたなど話してくれる人もいます。

一つのことをしていると見えてくるものが色々あり、子育てもなかなか難しいと感じながら、今日のようなことを知ってもらおうと次に何かに出会った時、自分の中で膨らんでもらえれば良いという思いから話題提供でお話しさせていただきました。